

Title	歐勢東漸の始めと日本人
Sub Title	
Author	岡本, 良知(Okamoto, Yoshitomo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.1 (1934. 4) ,p.23- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340400-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歐勢東漸の始めと日本人

岡 本 良 知

一

ヨーロッパ人が初めて東洋に現れたときより日本に到達したまでの期間は、その航海発見の進展の迅速さより考へれば餘りに永かつたといはねばならぬ。

十六世紀の航海術、船艦の大きさと速度、海の内と経験の進歩の程度は前世紀に較べて大きな懸隔があつた。殊に果敢な海上精神と霸氣の旺盛さはいよいよその頂上に達しやうとするに近かつた。それ故に、前世紀ポルトガル人がセウタ占領（一四一五年）よりアフリカ大陸を一週して印度に到達した（一四九八年）までに八十四年を要したが、印度に根據を占め四方に伸びた十六世紀の初頭には、支那に達するにそれより十六年を費すに過ぎなかつた。エスパニヤ人も亦初めてアメリカの一島を發見して（一四九二年）よりその大陸の諸國を占據し、進んで太平洋を斜斷してフィリッピン諸島に及ぶまでに二十

九年の短期間を経過したに過ぎない。

然るに、支那とフィリッピン諸島より日本へは、兩國人のそれまでに進歩し來つた世界の兩半球に較べて、一葦帶水ともいふべき海を隔てゐるのみであるが、それを越えて日本を見出したのは更に二十有餘年の後であつた。その間に於てもポルトガル人は大船隊を以て數々南支那を訪れ、稍々後には北進して福建浙江の沿岸に根據地を造るに到り、エスパニヤ人も數度太平洋を横斷してメキシコよりモルツカ諸島へ遠征船隊を送つた。

このやうに日本の近海を多年航海して而も日本に到着しなかつたことを觀察すれば、多くの理由を發見するに違ひない。十六世紀初頭に於けるポルトガル人、エスパニヤ人が、極東に進出するに従つて、日本及び近隣の諸國を如何に識り、如何に接觸したかを研究するのはそれらの理由を解釋する最良の方法であらう。

二

ポルトガル人の印度出現の初めより南洋諸島に及びその足跡の達するところに於て、久しい以前より支那人がそれらの諸國に植ゑてゐた通商的、植民的な勢力の大きさを頻りに見聞しなければならなかつた。十六世紀初半印度に在つてポルトガル人發見航海の史を編んだ最も信憑するに足る諸著者が書き留

めた幾多の事實を擧げることが出来る。

ガスバール・コレヤに據れば、ワスコ・ダ・ガーマが一四九八年初めて印度カリコに着いたとき、カナノールの王及び家臣等と談を交へたことがある。その談話中に、「我等（ポルトガル人）の船ナオの到來したるまでに、既にマラツカ、支那、レケオス方面より大小併せて八百艘以上の船が諸國の人々を載せ、豊富なる商品を積みみて毎年印度に渡り、カリコに寄港し、沿岸あまねく經巡りてカンバヤに行きたること四百年を超えたり。」^{二〇}といふことがあつた。またコレヤは、一五〇〇年ペドロ・アルワールレス・カブラルが本國へ歸帆するに際しカリコに代理者を殘しその居館を建設せしめたことを述べてその地に嘗て在つた支那人の商館をそれに關聯せしめ、「何故ならその地には支那人カリコに滞在し且つ前記せし如く印度を經巡るときのための支那館ありき。土人のそれをシナコタと稱するは蓋し支那人の城を意味す。」^{二一}と報じた。それに就ては尙同著者が、一五〇五年カリコの王弟よりその王にポルトガル人を好遇すべきこと説いた語の一節として、「それ故に彼等（ポルトガル人）の國に於て商業を營む如くに（當地に於ても）その交易の行はるべきは理りなり。その故は、支那人のカリコに來りしときに石造家を築きて住みても尙風習を毀つことあらざりき。そは現にポルトガル人のある如くに外國商人たる支那もありしなれば。」^{二二}といつたことを録した。このカリコの支那商館のことを、ジョアン・デ・バロスも次の如く傳へた。「（カリコの壘壁を）土人シナコタと稱す。これ嘗て支那人が胡椒貿易を行ひしときそこに一居塞を築きたるの因れ

に依るなり。土人は城塞をコタといひ、シナは支那人あるの故に附したり。今もそこに彼等の廢趾あり。」
マラバル沿岸のレペリン島にはカリコに於けるより遙かに舊い支那人の渡來があつたことをポルトガル人は聞知した。「また四百七十年前支那人商貨を満載したる十艘のジャンクを以て印度に渡り來りて久しく滞在し終に印度に死せりといふ。四十年後にはその子孫の外何も残さざりしといふ。」^(五)カンバヤにも時代が後れてそれに似た傳説が残つてゐた。一四〇〇年の頃カンバヤ王ペルシヤトがその地方では始めての東方風の戰船を造り、それを用ゐて多くの異教徒と戦ひ勝つた。「その最大なる勝利は支那人の二艘のジャンクを破りたることなり。當時支那人は印度沿岸に航海してありたれば、その地にも香料貿易のために商館を有せしなり。ペルシヤトはその戦に勝ちたれども、その二弟、五叔父及び多數の重臣を殺し、自らも甚だしく負傷せり。」^(六)

同じきバロスに據ればセイロン島メリヤポールにあつた支那人に就て、「ポルトガル人初めて來りし頃には、こゝに最大の居所を有せし支那人のありし時代の争亂によりて（この地は）全く荒廢してありたり。支那人の居所は今より見ても大なる館たりしならん。」との消息があり、また支那人の貿易上の勢力の大なることは「支那人等がこの島（セイロン）と大陸との間を香料を得るために征服した」一時代を有し、島を支配し、またマラバルの一部及びコロマンデルにもその力が及んだことは單に土人の傳説のみならず地名に歴然たる徵證が見られるとの説明がある。^(七)また印度ジャワルに於ても「その附近の諸島

にはポルトガル人の如くにシャツ、胴衣、袴下を着けたる他の白人ありて、銀の貨幣を有したりといはる。これによりて見ればそは支那人なるが如し。唯にこれらの人々のみならずして、當地には着色の人々もありたり。そは定住したる支那人なりと^元いはれたとの消息があつて、二時代に互つて、乃ち黒色のは先代の子孫、白色のは新來の支那人として移住したこともあつた。

南洋方面では、スマトラ島でポルトガル人が「この島と印度との通商はその始め支那が左右し^{二〇}」てゐたことを知つた。モルツカ諸島に就ても、「舊來は支那人、マライ人、ジャワ人の三民族のジャンク來れり。殊にマライ、ジャワの二民族より支那人に就てより多く注目せらるるといふ。今日に及ぶも一大島のバテシナ・ド・モローといふ名稱に支那人の消息遺る。その島の岸に沿ひて他の一島あり。その住民によれば、バテは一般に土地を意味しシナの語と合して支那人の土地といはれ、これを他のバテシナ・デ・ムアールと區別せんためにその個有名モローの名を附するなり^{二二}」との支那人植民の徴證を載せ、尙モルツカの香料の發見と船載が支那人に基因することを案じて、「支那人の入港によりて丁香のこの諸島に産するを始めて知られたり。(中略)支那人この諸島の航海を續け丁香及びバンドの肉荳蔻、荳蔻花を求めたるが、その交易の評判高きを聞きてジャワ人も亦こゝに來り、終に支那人の來るは止みたり^{二三}。」と報じた。こゝには遇目した數例を擧げたに過ぎないが、ポルトガル人が尙多くの國々に於てこの種の傳説を聞き遺跡を觀たであらう。それを漏らさずに書き留められてあつたならば、それを以てより確かに支那人

の中世に於ける西南海上の活動を推知し得るのである。こゝに列記し得た傳説のうちには比較的正しいものもあり、幾分誤り傳へられ或は誇張せられたものもあらうが、事實に基づいてゐることは疑へない。

支那人が中世印度洋の彼方にまで航海し勢力を有したことは、アラビヤ人が西方より極東にまで通商をなしたことと併せて既に諸學者によつて研究せられた。ユール氏、ペリオール氏、ロツクヒル氏、桑原氏、藤田氏等の諸著書(二三)に詳説せられてゐる。それらの研究を對照すれば前記した十六世紀のポルトガル人が見聞した前代の印度及び南洋に於ける支那人の大勢力が全く肯定すべきものである。こゝにはポルトガル人の知り得た支那人の消息が如何なるものであつたかを論ずるのであるから、それらの諸學者の論説を一々擧げることをやめ、唯一例として最も適切な藤田博士の一論文を引用するにとどめる。

「支那人の南洋に於ける勢力は元來明初に於て増大したやうである。それは元來至正年間に出來た島夷誌略にはさまでその地の支那人居留せることを傳へて居らぬが、明初に出來た瀛涯勝覽、星槎勝覽などになると、頗るその趣を異にしてゐる。」と述べて、爪哇、華兒昔、蘇兒把牙、スマトラの舊港に於て支那人が或ひは頭目となり、或ひは開創者となつた記載を、前記の明初の二書より指摘し、また「太監鄭和に隨ひて、通事として西南海上蕃國に行つた費信の星槎勝覽に依ると、その隨行したのみで四回ある。

(中略)一、永樂七年に於いて、正使太監鄭和に隨ふて、占城・爪哇・滿刺加・蘇門答刺・錫蘭山・小咀喃・柯枝・古里等の國に行き、開讀賞賜し、永樂九年に至りて京に廻る。一、永樂十年に於いて奉使少

監楊敕に隨ひ、榜葛刺等の國に往き、開讀賞賜し、永樂十二年に至りて京に廻る。一、永樂十三年に於いて、正使太監鄭和等に隨ひ、榜葛刺諸蕃に往き直に忽魯謨斯等の國に抵り、開讀賞賜し、永樂十六年に至りて京に廻る。一、宣德六年に於いて正使太監鄭和等に隨うて諸蕃に行き、直に忽魯謨斯等の國に抵り、開讀賞賜し、宣德八年に至りて京に廻る。(中略)たゞ永樂年間には此舉げたる三回の下蕃以外になほ一回ある。それは永樂十一年に矢張太監鄭和を遣つたので、此時隨行した通事の馬歡が瀛涯勝覽を著したのである。之に依ると、寶船六十三艘、大者は長四十四丈四尺、濶十八丈、乗組人員總計二萬七千六百七十人である。隨分大規模であつたが、是は此時のみでなく、毎度からであつたやうである。即ち前に舉げた宣德六年のも略ぼ同様であつた。(中略)當時成祖の遣つた艦隊は波斯灣頭の忽兒模斯、紅海頭の阿丹邊まで往つて居るが、(中略)惜しい哉宣德以後かゝる壯舉は熄んだが、支那人の南洋通商は固より依然たるものであつた。^(二四)と説かれた。

この文によつても明初印度南洋に於ける支那人の交通と植民的成功の次第が稍々窺へる。宋元代の支那人の通商に就ても他の著者によつて明かに知られるが、ホアイトヴェー氏の簡略な説明を引用するに止める。第五世紀には支那船はエウフラテスの沿岸遠く北方に現れた。併し、彼等の航海の距離は次第に小さくなつて行き、十五世紀の初にはマラバル海岸より遠方へは來なかつた。この世紀の中頃には全く印度を訪ねることを止めた。ポルトガル人がカリコに達したときには、住民の心中に尙その支那人に

就ての記憶が鮮かであつた。^(二五)十六世紀のポルトガル人を刺戟したのは恐らくはこれらの支那人の活動であるに相違なからうと思ふ。

次には、ポルトガル人が印度出現の當初より諸港に於て支那の物産の行き渡つてゐるのに接し、また屢々支那人と遭遇してそれに注意を向けねばならなかつたことを擧げる。

フェルナン・ローペス・デ・カスタニエーダに據れば、ワスコ・ダ・ガーマが初めてカリコに着いたとき、その地のアラビヤ人が大なる貿易をなしてゐて、その集散する商品のうちに多種類の「美麗なる支那の産物」が見られたといふ。^(二六)

ガスバール・コレヤは次の如き興味多い挿話を載せた。一五〇〇年アルワレス・カブラルの船隊が印度より本國へ歸航せんとしてカナノールを出帆し一大灣中にて、その近くを回教徒の一大船が過ぎるのに遇つた。ポルトガル船隊はそれを包圍して停船を命じた。回教徒の船は遁れ去ることが出来ないで、小舟を出してその船長外數人が乗り來り、ポルトガルのカピタン・モールに「贈物として美しき磁器、支那の緞子^{ダマスコ}・綸子^{セチン}を充したる黄金の函、安息香の塊、囊入麝香を詰めたる陶製容器を齎らしたり。曰くその船はカンバヤ王の所有にして、マラッカより來り、それらの(支那産)品の外、丁香、肉荳蔻、荳蔻花、檀香も積みてあれば欲するものを取りて害を加へらるゝなかれと。(中略)、カピタン・モールは回教徒の齎し來れる贈品を辭して携へ歸らんことを命じたれども、彼等はこれを肯はずと答ふ。こゝ

に於てカピタン・モールそれに就きても、また支那産の物品は本國に於て未だ見たることあらざりければ、そのみにても國王のためにポルトガルへ携へ行くは悦ばしとて感謝せり。これを聞いて彼等も亦これを受納せられたるを喜びとし、甚だ満足して小舟を彼等の船にやり、再度美しき絹衣を纏ひたる甚だ色白き支那の一男一女を伴ひ來り、カピタン・モールに妻として携行せられよといひて贈りたり。カピタン・モール復たこれを感謝せり。^{こも}

尙多くの事實が諸書に載せられてゐるけれども、煩を避けてこれ以上列擧しないが、ポルトガル人が支那産物と支那人に接觸したこの種のことは數年の間に屢々生じたのである。

前代支那人の印度に於ける活動の徵證の見聞と、當代に直面した夥しい支那産物と支那人に關する智識は、アフォンソ・デ・アルブケルケのマラッカ占領以前に於て既に如何ばかり強くポルトガル人を刺戟し、支那の存在を意識せしめたであらうか。思ふに、ポルトガル人が當初に東印度で得た消息は事の大いに拘らず本國へ傳へられたに違ひない。従つて本國でも、印度にある者と等しく、未だ到達するに及ばぬ遠い彼方の支那とその國民を探知せんとする意志が抱かれるに至つたであらう。それを立證するポルトガル國王の一訓令がある。乃ちディオゴ・ローペス・デ・セケイラが本國より東印度に向つて發途するに當り國王ドン・マヌエルは一五〇八年二月十三日付で命令書を與へた。その一節に次の如き支那人に關する一項が見られる。

「支那に就きて質せよ。孰れの方より、幾何の遠方より來るや。彼等の通商するマラッカその他の地點に屢々來るや。その船の用法如何。彼等の來る年内に歸航するや否や。マラッカまたは他の孰れかの地に通商代理若しくは商館を有するや否や。彼等は柔弱なりや尙武の民なりや。如何なる衣服を着くるや。體軀大なりや。その他支那人に就きての萬般の消息、基督教徒なりや異教徒なりや。その領國大なりや否や。彼等には一人以上の王ありや否や。彼等の間に回教徒ありや、または彼等の信教に與らざる他の民ありや。若し基督教徒あらずとせば、何を信じ何を崇拜するや。如何なる風俗を保持するや。その領土は孰れの方向に擴がスや、何國と隣接するや。」^(二八)

この一節に引き續き、別に生絲の產地、その商品としての運輸狀況、價值、用途等の調査を命じた一節がある。

この調査命令の箇條は支那人及び支那に關する殆んど總ての點に觸れて甚だ詳細に互つてゐる。また當時の在印度ポルトガル人の最も重大な關係を有した回教徒及び回教國の問題、香料產地探索等の熱心さにも劣らぬ強い關心を示すものと思はれる。然るに、その命令文によつて觀取せられる如くば、このときポルトガル本國では支那及び支那人の正體に就て殆んど無智識であつたといつて過言でない。古來有名な支那の産物たる絹、中世のアラビヤ航海者、イタリヤの旅行者等の傳へた支那の位置に關してすら、このときまではポルトガル人は留意しなかつたのであらう。知らなかつたからこそ知らうとする欲

求が生じたのであるが、それまでに心を向けしめた大きな刺戟のあつたことは前記した如く明かである。それを以て考へても、ポルトガル人は當時支那の存在を強く意識したことが疑へない。漠然たる恐怖の念をすら交へてゐたのではないかと想像出来る。併し、未だポルトガル人はこのときに支那と如何なる關係を結ぼうと考へる程に到つてゐなかつたことも容易に推察せられる。矢野仁一氏の説かれた如き支那との通商を開かうとする意志を既に有してゐ、マラッカと支那とが盛に交通してゐたことを充分に知つてゐたとは思はれない。

マラッカ征服戦の頃に近づくるとポルトガル人が支那人と接觸する機會も多くなり、その智識も急に確かになつて行つた。その程度は、稍々以前にイタリヤ人旅行者ルドヴィツコ・デ・ワルテマがマラッカを遍歴して「その市は大陸にありて支那王國の朝貢國なり。」等と報じた如き漠然たるものではない。ポルトガル國王よりの訓令を以て支那人の調査をもせなければならなかつたディオゴ・ローペス・デ・セケイラの船隊がポルトガル人として初めて一五〇九年九月マラッカに着いたとき、直に支那のジャンク四艘の船長の訪問を受けた。「セケイラは彼等（支那人船長）と甚だ親しくしたるは、蓋し、彼等がヨーロッパ人の如き態度の人なりければなり。彼は喜びて屢々支那人のジャンクに赴き、食事を共にせしが、彼等も亦同じく我が方になしたり。そはセケイラの滞在したる間繼續」した。その間ポルトガル人が安心して交易してゐたとき、支那船長等よりこの市の住民たるマライ人の姦惡貪欲にして信用し難い所以を忠

告せられ、セケイラはその言に耳を傾けなかつたが、後マラッカ王がセケイラの一行を要撃して塵にしやうとしたとき支那人の忠告に思ひ當つたといふ^(三)。セケイラはこのやうに親しく支那人と交渉し、その人となりを知り、併せて國王の訓令に答へる資料を得たのである。セケイラがマラッカに設けた商館の事務に當り、その退去後マラッカ王に囚はれたポルトガル人の一人ルイ・デ・アラウジョよりときの印度總督アフォンソ・デ・アルブケルケに宛て、マラッカの情況を報じた一五一〇年の書翰は支那人のみならず極東の他の諸民族に就ても知り得た消息を詳かに報じた。

「支那人は四月に來り當地を五月に出帆する彼等に適當なる季節×××(闕字)而してその航程に往二十日三十日、復に同日數を要す。彼等は×××(闕字)麝香、緞子、下等綸子、コルニジャン、樟腦、大黃、眞珠×××(闕字)優良なる明礬を齎らす。毎年八・十艘のジャンク來り、その國へ胡椒と丁香を載せ行く。」

これは支那人のマラッカ航海と貿易の概要である。

「ゴール人は當地へ一月に來り、四月その國に向ひて出帆す。略々四十日間その往航に、同じく四十日を復航に費す。彼等は商品として緞子、麝香、黄金函、刀劍、手楯、銅、麥、地金を齎らし來り、當地よりは胡椒と少量の丁香を舶載し行く。彼等はその國の王の所有なるジャンクにて毎年來り、(その國王は)その××(闕字)以外の者の來るを許さず(中略)マラッカの周圍には他に二個の金鑛あり。その金鑛

及びゴール人の國より毎年九・十バールを當地へ將來せらるゝといふ。」^(三三)

これはゴール人に關する消息である。ポルトガル人が報じた支那人以外の極東の民族の名としては、年代的に見て、第二の記録である。その第一は、前に引用したポルトガル人の初めて印度へ到着する前にマラッカ、支那、レケオスの方面より多くの船がカリコへ通商に來たとガスバール・コレヤの記載に見えるレケオスであるが、そのときのレケオスがどれ程正確な字義を有するかを疑ふものである。

ディオゴ・ローベス・デ・セケイラの後二年一五一一年總督アフォンソ・デ・アルブケルケが十三艘の船を以てマラッカに來りこれを攻撃した。このときにも既に支那人の如何なる者かをセケイラの一行の情報によつて知つてゐたポルトガル人は支那船長等と親しく交はつた。

「(六月の)或る日、總督の船^{ナウ}へ六人の支那船長來り、總督にいひて、マラッカ王は彼等及びその船員等を抑留すること久し、これ(この度)ダル王と戦はんために來りし艦隊に彼等(支那人)の援助せんことを怖れて放たざりしなりき、今王は市の防備をなすに忙殺せられたれば、ひそかに彼等はそのジャンクに歸るの機を得たるなりと陳べ、その故國に歸るの允しを總督に請ひ且つ約束しけるは、若し總督にしてマラッカを取りたらんには支那より多大の物資を満載し來らんと。(中略)總督は、この支那人等と會ひたるを大に悦び、答へて曰く、無事にその國に歸らるべし、マラッカを取りたりと聞きたらば、商品を積みて再びマラッカに來るの約束を忘却すべからずと。(中略)(八月、マラッカ占領後)支那人等も

亦總督の下に來りて、その航海の季節風來りたればとて出帆の允しを請ひたり。總督はこれを許諾し、且つ（その後）マラッカに來る支那人のために保證鑑札を與へて曰く、彼等（支那人）には全く親誼と平和をなし正義と誠實とを以て接すべしと。これを聞きて悦ぶこと一方ならずして去りたり。このときまた多大の物資を舶載し來るべきと、近隣の諸國をも勧誘すべきを約束せり。^(三三)

「マラッカの兵力に熟通し、我等の兵が敵の十九が一にも當る寡數なるを視たる支那人船長等は總督に上陸せざらんことを勸告して曰く、陸に大兵あり、この敵には飢餓せしむるの策をとるは良法たり。これ陸上には收獲による食糧あらざる故に海上より運ばるゝを妨害せんには食道盡きて降服すべければなりと告げたり。（中略）支那人等はマラッカの占領戰の永引くを見て、總督に歸帆するの允許を求め、且つこの戦ひの故に糧食を市に得べからざればとて米の供給を請ひたり。總督は充分に米を給し、加之、彼等のジャンクに積みたる胡椒が（敵たる）一マライ人回教徒の所有なるを知ると雖も敢て行くがまゝに任せたり。この好意と庇護を支那人は甚だ悦び、またマライ人回教徒の如き姦惡なる民の權力が奪ひ去らるゝに到るを神に感謝せり。このときまた彼等の約束したるは、回教徒のマラッカより放逐せらるゝときは驚くに足る程多量の支那物産を積み來るべし、今日まで回教徒より受けたる不良なる交易の状態に於てはジャンクも多くは來らざりしなりと。これらのジャンクの一船主にしてプラタと稱する者互市のため暹羅の町に行かんとせしかば、總督は彼に暹羅王への使節を載せ行かんことを依頼せり。^(三四)

これらの文に見える如く、マラッカ征服戦のときにはポルトガル人と支那人とは知り合ふといふ程度を超えて親しく交はる程になつた。絶大な好意を以て援助し合つた心底には、勿論利害關係上に立つ外交的打算が藏せられてゐた。支那人の方より見れば、「豫てマラッカ王マハメッドが彼等より買ひたる商品に支拂ひ悪しきを忿りて」^(三五)ポルトガル人の力によつてこれに報復することを快しとし且つポルトガル人占領後はこのとき示した好意によつて有利な交易を希望したであらう。ポルトガル人にとつては、「彼等（支那）の國王の勢力の偉大なると、その領土大にして、文化と富の發達また優れたるを豫てより聞きてありたれば、」^(三五)支那人をして歸國後好評を吹聴せしめんとしたことは、「總督と彼等（支那人）は小舟に同乗してポルトガル人の戦ふ様を觀、親交の歡びを得んためその狀況を彼等の國王に傳へん」^(三六)ことを求めたとジョアン・デ・バロスの述べたところによつて他日支那と交渉を開くときに資せんと考へてゐたのは明かであり、併せてこの機會に將來のマラッカに於ける支那人の貿易を盛ならしめ多量の珍貴な支那物産を吸収しやうと欲したであらう。ポルトガル人は直接にも支那人を利用すること忘れなかつた。カスタニエーダの記す如き、マラッカを封鎖して糧道を絶つ戦法を支那人より勸告せられ、バロスによれば、その攻圍戦に支那人より積極的の援助の申し出でを受けてそれを拒つたのは、策戦上の確信あつてなしたか、或ひは直接な支那人の援助を嫌つたのか知れぬが、それに拘らず兵を上陸せしめるときには遠慮なく支那人の船を借り、戦後暹羅へ使節を遣るに支那人の船に便乗を依頼した。

このとき、またポルトガル人を最も刺戟したのは支那の貿易であり、支那の物産への欲望であつた。年々寡からぬ支那船が、マラッカ方面より印度にまで達し、またマラッカ方面の人も支那に行つて舶載した生絲、絹織物、香藥の類は餘程夥しい量であり、マラッカを中心として廣く印度方面に行き渡つてゐたことは疑ひを容れない。當時の支那と南洋方面の通商を一瞥してその情況を述べやう。

抑も、明代に於ては南洋方面より支那への來航は前代に比し遙かに頻繁であつた。概して明初に盛んで、後次第に疎くなつた傾向があるが、それでも成化・弘治・正徳の頃には諸國の交通が絶えなかつた。明史外國傳に據れば、滿刺加より成化五年に支那に向つた船が途中安南に漂着し、成化十年、十七年、正徳三年に入貢を果した。蘇門答刺よりは成化二十二年に、爪哇よりは弘治八年に來た印度支那の占城、眞臘、暹羅安南の諸國は更に頻繁に支那へ交通した。後藤肅堂氏の弘治正徳外國來貢表(三七)に據れば安南のみでもその間に五度支那へ入貢した。記録に現れない群小の私船の支那貿易が如何程の數に達するか分らぬが、これらのマラッカ以外の諸國の船も支那よりその物産を積みマラッカ方面へ仲介貿易をなしたことも想像に難くない。ポルトガル人の觀察に従へば、「十二月一月に吹くこの同じき北風に乗じて、東方なるマラッカの一侧の沿岸により支那、チャンバ、カンボヂヤ、暹羅、ボルネオ諸島より來航(三八)」したのは毎年の例であつたといふ。

また明代支那船の海外渡航は公には禁せられてゐた。ポルトガル人はその間の事情にも通じて、「支那

にては國民は何人も他國へ航海する能はず。大陸沿縁の島に住む人々は年内に歸り來るところへは渡海し得るも、その島の爲政者の許可を求め年内に歸來するの保證を與ふる要あり。且つ五十噸を超ゆる船を有するべからず^(三九)」と述べた程であるが、「初明祖定制、一板不許^(三九)入^(三九)海、承平久奸民闖出入^(三〇)」とある如く明代中葉にはその禁止は勵行せられなかつた。前に引用したポルトガル人の記載や、藤田博士の文に見える如く、元末明初以來印度南洋方面に渡つて、或ひは頭目となり、開創者となり、通商の館を設けて廣く交易に従つた者を始め多くの支那人が海外に於て數代土着したうちには、一旦出國して年を重ね禁止令の故に本國に歸り得なかつたものも少くはなかつたであらう。また本國の弊政を嫌ひ海外の事業の有利なるに誘はれたものもあらう。カスタニエダに據れば一五一一年十二月末(マラッカ戰後)、ポルトガル人のモルッカ諸島派遣船隊の出發二日前總督アルブケルケの命を承けポルトガル商品をそのジャンクに積んで同諸島に出發した一支那人があり、それはマラッカに妻子を有してゐた如き^(三二)、また同じき著者に據れば、フェルナン・デ・マガリヤエンス世界周航船がマガリヤエンスの死後ミンダナオ島よりサンギン島に行き、それより航路を誤つたとき「マルッコ(諸島)より行く支那の一ジャンクに遭遇せり。相圖にてその船と語りて航路を引返すべきを^(三三)」知つたこともあつた。それらは支那人の海外に於ける定着者通商者の一例である。支那に於て海外渡航の禁が有名無實になつたとき、支那より濫出した者と、海外移住者の本國に交易を求めた者とが、いよいよ頻繁な通商と植民の活動を行つたであらう。

一五一〇年頃支那よりマラッカへ多量の物資が舶載せられた有様をドアルデ・バルボーザは次の如く観察した。「(マラッカには)あらゆる方面への各種の商品を取引す。四檣の美しきジャンク來りて、多量の生絲、精良なる繭、多數の磁器、綾織、金欄、着色綸子、麝香、大黃、各色撚絲、硝石、多量の優良なる銀、眞珠、黃金櫃、扇子その他の器物を齎らす。これらの物資は當地にて地の商人に甚だよく賣りさばかる。その歸航には胡椒、香、グラン染カンバヤ織物、サフラン、加工珊瑚、珠數珊瑚、未加工珊瑚、木綿色布、ベンガラ白木綿、鉛丹、水銀、阿片及び他の多くの商品、カンバヤの香藥品を載せ行く」^(三三〇)

この著書は別に支那消息を述べた章に於て「予は支那人に就きては智識を有せず」と冒頭にことはり書きをしたから、この文に見える如き多數の珍重せられる物資をマラッカに運び來つて印度方面の産物と交易した大船が何國人の船であつたかを明確には知らなかつたかも知れない。バルボーザの觀たところではそれらの支那物産をマラッカ商人が競つて買った。このやうな大船は、バルボーザの文意でも察せられる如く、年々絶えることがなかつたであらう。少くも、マラッカ戦争の前後數年間にはポルトガル人の報告によつてそれは確められる。一五一一年七月一日アルブルケの遠征船隊がマラッカに到着して港内の一小島の邊りに投錨したとき「その場所は支那船の碇泊處なりければ、そこに支那のジャンクを見出し」^(三四〇)たことは、マラッカ港には専ら支那船のための碇泊處があつたと解し得るであらう。従つて餘程頻繁な支那船の來往が推測出来る。一五一七年フェルナン・ペーレス・デ・アンドラーデの南支那訪

問のとき、ジョルジ・マスカレーニヤス枝船隊が漳州に達した。ガスバール・コレヤはその情勢を敘述して、「我がポルトガル人のマラッカに來らざりし以前には、この市（漳州）よりマラッカへ毎年四艘のジャンク金銀生絲を載せ行き、印度の産物を積みて歸りたり。ジョルジ・マスカレーニヤス更めてマラッカに渡り行かんことを彼等と約束せしも彼等は敢て行かざりき。」^(三五)と報じた一節がある。當時支那の繁盛な港の一であつた漳州より毎年四艘マラッカに向つたから、その上他の港よりも幾艘かゞ同じい目的で出港したことを推定し得る。一五一二年七月二十四日付でアフォンソ・デ・アルブケルケが印度レペリン島のアレ・アプレに與へた命令書にまた「今マラッカより來れる支那人に同じき物（グザラテ船より捕獲したる生絲）を與へよ」^(三六)といつたのはマラッカを経て印度へ支那船の來たこと明かにし、一五一三年十月二十日付でフランシスコ・デ・アルブケルケよりポルトガル國王ドン・マヌエルに呈した書翰によればその年に支那船がマラッカへ來たやうであり、一五一四年一月六日マラッカのカピタン・ルイス・デ・ブリトより國王へ宛てた書翰によれば、一五一三年に支那より四艘のジャンクが來た。これらの報告のみを見ても、マラッカ占領後の一五一一年、一二年、一三年には連年數艘の支那船が、印度へ渡つたのであつた。マラッカ占領前にはこれよりも頻繁であり、一五一四年以後も連年缺かさなかつたと推定して少しも無理がない。

このやうに連年少なからぬ支那船がマラッカへ來、また南洋諸國船が仲介して支那物産を豊富に行き

渡らせた。マラッカのみでも、支那物産が平素多量に民家にあつたことを證する消息がある。ガスバール・コレヤの傳へたところに據れば、アルプケルケのマラッカ占領後部下に命じて市中で發見した物を凡て彼の許に齎らさしめたことがある。その命を得て、カピタン等は市中へ却掠に赴き、兵と奴隸に命じて各戸に入りて見出し得る物を街路に取り出さしめたり。斯くて街路はあらゆる種類の物品、即ち安息香、壺入麝香、綾織、綸子、琥珀織、白絹、樟腦、加羅を詰めたる函に滿ち溢れ、戸内に檀香多かりき。甚だ勞多ければその總てに觸れざりしも、各人出來る限り運びて、よきものは小舟に積みたり。(中略)これらの物品は火災の難を防ぐため上を塞ぎて地下に造られたる屋舎に容れありしなり。斯くの如く夥しき數なりければ、壺中に粉末にて或ひは未成にて詰めたる安息香、綾織、綸子、白絹、多數の磁器のみを撰びて船ナオに載せたり。劣等品は運ばんとせざりしかば街路に滿ちて放置せられたり。正午までこのことに働き、小舟はそれを運ぶのみに忙はしかりき。一方にては、土中に埋りたる金粉入り壺、地金、支那眞珠をとるに従ひたるもありたり。(三九)と精細に戦後の掠奪の情景が描かれた。當時のマラッカが如何に通商の要津として富裕な港であつたか、眼前に見る如くである。このコレヤの文に見える掠奪物資の名はマラッカ以東のもの、みであるが、もとより以西の印度の産物も多かつたに違ひない。ポルトガル人にとつては征服し終へた印度のものよりも、未だ窺ひ知らぬ極東の物産がより多く注意を惹いたであらうが、兎に角極東の産物が西方のものより多かつたことも推察出来る。その指摘した物品の名は、暹羅の安

息香、印度支那の伽羅を除いて他は悉く支那の産物のみである。

また一五一四年一月六日付でマラッカのカピタン・ルイ・デ・ブリトより國王へ宛てた書翰に、「支那よりは麝香、眞珠、綸子、綾織の各種、磁器、錦欄及びその類品來る。彼等は大に賣るなり。(中略)大量の生絲を齎らし、また銀をも積み來る。彼等は商貨に通達する民にして、彼等の正しき價にあらずんば買ふ能はざるなり。」とマラッカ占領後の支那人の商業の種類と量と貿易界に於ける勢力とを報じた。ポルトガル人はこのやうに支那人の齎らした物産の珍らしさと豊富さ及び支那人の得てゐた大なる勢力を留意し、次いでまた支那人がマラッカ方面より印度、南洋の物産を積み歸り多大の利益を得てゐたことにも略々通じてゐた。

マラッカに來らぬ以前には、ポルトガル人は支那人の需要するものとその利益の率を知らなかつたであらう。當時は彼等にとつて餘り遠方の國であるから、未だ具體的には考へるに及ばなかつた。唯支那人が以前より印度南洋方面に往來して香料類を舶載したことは、既に述べた如く留意に止つてゐた。偶々、ポルトガル人の著書中に、一五〇四年、マヌエル・デ・テレース・ワスコシセーロスの船隊がコチンで回教徒の船隊と戦つて勝つたとき、「その船中にロマリヤあり、それは十萬バルダオ以上を價す。これ蘇合香なり。回教徒はこれをロマリヤと稱し、彼等のマラッカ地方へ商ふ最大の商品にして、支那に於ては更に高價なり。」^(四二)といふが如き情報があるが、これは偶然の聞知であつて、彼等の注意を強く惹いたも

のではない。併しマラッカに着くや直に支那人と接し大に探索せんとする意志を有するやうになつた。前に引用した一五一〇年のルイ・デ・アラウジヨよりアルブケルケへ宛てた書翰には、支那人が歸航には胡椒と丁香を多量に載せて行くことを報じた。その當時の知識を以て著さした、ドアルテ・バルボーザの著書は、支那人がマラッカよりの歸航に、胡椒、丁香、カンバヤ織物、サフラン、珊瑚、綿布、鉛丹、水銀、阿片及び他の香藥を舶載し、またカシヨ・ブシヨといつてポルトガル人の知らぬ香料を大に歡ぶ、ブシヨは、メッカを経て西方よりカンバヤへ渡される葉婁で支那とジャワでは頗る高價である、また鐵、硝石、綿燃絲を積む。胡椒は支那では地方により一キンタルに就き十五・六クルザード若しくはそれ以上の高價であるのはマラッカでは四クルザードで買へると詳細に互つて述べた。^(四三)

マラッカで得たこれらの知識を以て直に支那貿易を試みやうとするに至つた。少くともポルトガル人をして支那へ進出せしめるに幾年かを早めたと見なければならぬ。記録に現れたところに據ればマラッカ占領後二年にしてポルトガルは支那へ交易船を遣はした。一五一四年一月六日マラッカのカピタン・ルイ・デ・ブリトよりポルトガル國王及び印度總督アルブケルケへ宛てた二書翰^(四三)には、一五一三年に支那へ船を遣したときにも、その次のマラッカ人のジャンクに托して支那へ親書と贈品を送つたときにも胡椒を積んで行つたことを報じた。一五一六年に支那へ行つたラファエル・ペレストレーロにもその舶載して行つた商品で多大の利益を得て歸つたが、その商品は胡椒を主としたものであつたことを容易に推

察し得る。その翌年支那に達したフェルナン・ペーレスの船隊も、前に「支那への商品たる胡椒を積ま
んためにバセン」^(四五)へ寄港した。その船隊がバセンで「その（サマトラの）胡椒と支那にて高價なる他の
商品」を積まんと到着したとき「その港（バセン）にガスバール・マツシャードが數人のポルトガル人
と共にあるを見出したり。こはマラッカのカピタンの命によりてマラッカ商館依頼のジャンクにベンガ
及び支那に送る胡椒」^(四六)を積んでゐたのであつた。このときには同じいバセンに二隊のポルトガル船が支
那へ送る胡椒を積みこんでゐたのである。それらの胡椒を主とした商品はポルトガル人に豫想の如くに
利益を享受せしめた。フェルナン・ペーレスが支那から歸つたときには支那より多量の物資を載せ來り
マラッカの窮乏の急を救ひ、また支那へ積んで行つた物で多大の利益を得て歸つた。^(四七)これらの事實はポ
ルトガル人のマラッカ占領の頃より既に支那へ輸出すべき商品に關して充分な調査を行つてゐたことを
證するものといつて差し支へがない。

以上はポルトガル人が印度へ來た當初より絶えず支那人の印度南洋に於ける存在を意識せしめられ、
年を経ると共に屢々これに接觸する機會を得てマラッカ戦争の頃までには次第に精密な智識を有するに
至つたので、それを無視することが出来ないまでに強い關心を有して他日支那との交渉を開かんとする
覺悟を抱いたことを説き、次にポルトガル人がマラッカを中心に印度南洋方面へ毎年少なからぬ支那船
と他國の仲介貿易船の齎らす珍貴な支那産物の多量に行き渡り支那人のそれを賣るに大利を得てゐたこ

とを留意し、また支那へ船載せられる印度方面の物資を以て多大の利益を得べきことをも調査し、その支那への出入の貿易をポルトガル人自ら行ひ、その利益に與らんとする意圖を藏するに至つたことを述べた。

- (一) Correa, *Lendas*, I, P. 69.
- (二) Correa, *Ibid.*, I, P. 186
- (三) Correa, *Ibid.*, I, P. 631
- (四) Barros, *Da Asia*, Dec. III, Liv. IX, Cap. IX, - tom. VI, P. 437.
- (五) Correa, *Ibid.*, III, P. 777.
- (六) Barros, Dec. IV, Liv. V, Cap. III, - tom. VII, P. 559.
- (七) Barros, Dec. IV, Liv. V, Cap. III, - tom. VII, P. 559.
- (八) Barros, Dec. IV, Liv. II, Cap. I, - tom. V, P. 109.
- (九) Galvão, *Tratado*, P. 45.
- (一〇) Barros, Dec. III, Liv. V, Cap. I, - tom. V, P. 510.
- (一一) Barros, Dec. III, Liv. V, Cap. I, - tom. V, P. 577.
- (一二) Barros, Dec. III, Liv. V, Cap. I, - tom. V, P. 579.
- (一三) Col. Henry Yule, *Catha and the way thither*, London, 1913-16.

Col. Henry Yule, *Notes on the Oldest Records of the Sea-route to China from Western Asia* (Proceeding of R. G. S., 1882).

- Paul Pelliot, Deux Itinéraires de Chine en Inde à la fin du VIII^e Siècle (Bulletin de l'École Fr. d'Extrême-Orient, 1904).
- W. W. Rockhill, Note on the Relations and Trade of China with the Eastern Archipelago and the Coast of Indian Ocean during the 14th Century, (Young-Pao, 1914).
- F. Hirth & W. W. Rockhill, Chau Ju-kua, St. Petersburg. 1911.
- 桑原隲藏氏 滿蒙庚の事蹟。
- 藤田豊八氏 東西交渉史の研究。南海篇の諸論文。
- (一四) 前田豊八氏 歐勢東漸初期に於ける海外の日本人。(東西交渉史の研究。南海篇。138—143頁)
- (一五) Whiteway, Portuguese Power in India, P. 1.
- (一六) Castanheda, Historia, I, P. 44.
- (一七) Correa, Lendas, I, P. 266.
- (一八) Alguns Documentos, PP. 194, 195.
- (一九) 矢野仁一氏 近代支那外國關係研究 12頁。
- (二〇) Cordier, Histoire General, tom. 3, P. 109 所引。
- (二一) Goes, Cronica, Pt. III, PP. 4-6.
- (二二) Cartas de Afonso de Albuquerque, Tom. III, PP. 9, 10
- (二三) Correa, Lendas, II, PP. 224, 243.
- (二四) Castanheda, Historia, III, PP. 188, 199.
- (二五) Barros, Dec. II, Liv. VI, Cap. II, - tom. VI, PP. 38, 39.
- (二六) Barros, Ibid, P. 57.

歐勢東漸の始めと日本人(岡本)

(四七)

四七

- (二九) 後藤肅堂氏「西力東漸と倭寇歴史」歴史地理二九ノ三。
- (三〇) Barros, Dec. II, Liv. VII, Cap. 1, - tom. VI, P. 11.
- (三一) Barros, Dec. III, Liv. II, Cap. VII, - t. V, P. 197.
- (三二) 明史・朱統傳。
- (三三) Castanheda, Historia, IV, P. 257.
- (三四) Ibidem, IV, P. 19.
- (三五) Barbosa, Livro, P. 369.
- (三六) Barros, Decada, II, Liv. VI, Cap. II, - tom. IV, P. 36.
- (三七) Correa, Lendas, II, P. 529.
- (三八) Cartas de Afonso de Albuquerque, V, P. 186.
- (三九) Ibid., P. 93.
- (四〇) Alguns Documentos, P. 347.
- (四一) Correa, Lendas, II, P. 247.
- (四二) Cartas de Afonso de Albuquerque III, P. 94.
- (四三) Correa, Lendas, I, P. 521.
- (四四) Barbosa, Livro, P. 375.
- (四五) Cartas de A. Albuquerque, PP. 94, 222.
- (四六) Barros, Dec. III, Liv. II, Cap. VI, - tom. V, P. 184.
- (四七) Correa, Lendas, II, 523.

(四六) Barros, Dec. III, LIV. II, Cap. VI, - tom. V, P. 176.

(四七) Barros, Dec. III, LIV. II, Cap. IX, - tom. V, P. 221.

三

マラッカ征服戦のときには支那人の外、レキオ人、ゴール人に就ても多くの消息を得、従つてポルトガル人は幾分の注意をそれに向けたやうに思はれる。

アフォンソ・デ・アルブケルケの子が父の傳記を著した書にこの當時マラッカに集り來る諸國人のことがある。

「マラッカ人は印度人を西方人といひ、ジャワ人、支那人、ゴール人並びにその方面の諸島の人々を東方人と稱す。(中略)マラッカへは毎年カンバヤ、シヤウル(中略)よりの船、支那人、ゴール人、ジャワ人の船(中略)來るを慣はしとす。(中略)マライ人は倨傲なる民にして惡計を以て人を殺害するを甚だ名譽となし、また陰險にして概して眞實少なし。然れども、ゴール人は絶えずマライ人と取引す。これ彼等(ゴール人)が品位高く物に慣れたる民なれば、マライ人それと交易するを誇りとなすの故なり。」

この書には別の章に於て特に抽出してゴール人の國、風俗、舶載品等を詳細に説明してある。それは

有名なゴール人の郷國詮議の論争の原因をなしたもので、既に知られるところであるからここには掲げぬが、その文のうち、必要な點を指摘すれば、その國が大陸であるともいはれ島であるとの風聞もあること、毎年マラッカへ二・三艘の船が來ること、その商品は絹類、陶磁器、銅、明礬、砂金と特にその國王の刻印ある板金であること、その國をレケヤと稱せられること、一月にその本國を發して、八・九月にマラッカを出帆し取引の終り次第迅速に去ること等である。その一節の終りに、「アフォンソ・デアブルケルケがマラッカ占領後印度に向ひて出發したる頃、シンガプーラの岬に彼等（ゴール）の船二艘到着してありしが、後にマラッカへ來れり。これ彼等がマラッカ王の海上司令たりしラサマネの勸告に従ひてマラッカのポルトガル人に取られたるを聞きその岬に止まりて敢てマラッカに達せんとはなさざるを、その地の知事彼等の碇泊しあるを耳にし保證（の語）と幡旗を遣はしたれば遂に來れるなりき。」と述べたのは留意に價する。前に引用した一五一〇年マラッカに囚れてあつたルイ・デアラウジョの書翰には既に委細にゴール人の航海と貿易に就て報じた。ポルトガル人はこのゴールにも少なからぬ關心を有し、それを戦争以前の如くマラッカに來航せしめやうと考へてゐたであらう。カスタニエーダは、この年支那人ゴール人の來航のときに備へるために胡椒を準備した一マライ人のことを記載した。

ジョアン・デ・バロスに據れば、マラッカ征服前には「この（マラッカの）市へ多數の船が湊り來る故に人口多し。そのうちには支那人レキオ人、ルソン人及びその他の東方人も來るを慣はし」とした。マラ

に於て支那人若しくは琉球人より得た知識を以てその書翰に「福建の海上にレキオ人あり。(中略)彼等はマラッカ王の時代にマラッカに赴くを慣はしとせり」と報じたのは、バロスの述べたところを確認せしめるものである。マラッカ占領時の東印度の情勢を語つたドアルテ・バルボーズが、「この(レキオ)人に就きては吾人は多くの情報を有せず、その故は我が君(ポルトガル國王)にマラッカ從屬してより未だ來らざればなり」と説いたところも亦一五一一年以前にはレキオ人がマラッカへ通航したことを意味する。ジョアン・デ・バロスが、マラッカ占領後ポルトガル人はその貨幣を鑄造するに當つて「支那沿海に横たはるレキオと稱ばるる諸島のレキオ人の齎らす多量の金」を用いたといふのは、その以前にレキオ人のマラッカに渡つて金を齎らしたとの意味か、それともマラッカ占領直後にもレキオ人の來たものがあつたといふのか、それ共マラッカ以外の港より仲介せられてレキオ人の金が着いたとの意味か不明であるが、バルボーズとワスユ・カルヴォの報告より推測すれば、レキオ人が直接にそのとき船載し來つたのではなからうと思ふ。

以上にポルトガル人のマラッカ占領のときまでのゴール人、レキオ人に關する記載を擧げた。これによつて考へられるのは、これらの二民族の名をポルトガル人がマラッカに至つて初めて聞知し、而かも接觸することがなかつたことである。それ故に、この二民族を敢て積極的に探索しやうとするまでに至

らず、従つて、それに關するポルトガル人の智識は頗る漠然たるものであるに過ぎなかつた。バルボアザのレキオに對する記載がその點を充分に説明するものと思はれる。

「支那の大陸に對し海岸に多くの諸島連なる。それらの諸島の外にも一の大なる陸土あり。人々のいふところにてはこは大陸なりと。そこよりは支那の船に似たる三・四艘の船毎年マラッカに來る。そは白色の人にして、いふところにては、甚だ大なる富める商人なりと。金銀棒、生絲、立派なる商品多くの小麥美しき陶磁器その他多くの商品を齎らし來る。マラッカよりは支那人の輸出する商品を積み出す。マラッカの人々は彼等を當地に於けるよき人々にして、支那人よりも富裕且つ正直なる商人といふ。その人々に就きては吾人は多くの情報を有せず。その故は、我が君にマラッカ從屬してより以來未だ來らざればなり。」

バルボアザの述べたレキオは頗る不確であつて、レキオ人がマラッカ出入の商品に就ては、稍々委しくまた幾分眞實に近いやうである。これは、マラッカ人よりの傳聞のまゝを記したから、マラッカ人がレキオ人のマラッカにて行ふことに委しく、遠いその本國に就て全く知らなかつたを示すのである。

次に考へられることはゴール人とレキオ人の差別である。ゴール人のことを報じたのはルイ・デアアラウジヨの書翰を第一とし、次に一五二二年四月一日付アフォンソ・デアルブケルケより國王への書翰、一

五二三年十月二十日付フランシスコ・デアルブケルケより國王への書翰、一五二三年十一月三十日付ア

フオンソ・デ・アルブケルケの國王宛の書翰であり、アルブケルケの傳であり、カस्ताニエダの著書であるが、レキオ人のことを記したのはジョアン・デ・パロスの書と一五一五年一月八日ジョルジ・デ・アルブケルケの國王に宛てた書翰とドアルテ・バルボザの著書とである。ゴール人の名を傳へた文書にはレキオ人のことが全く見えず、レキオ人のことを載せた書にはゴール人の名が見當らない。而してアラウジョの書翰に報じたゴール人、アルブケルケ傳の説いたゴール人とバルボザの述べたレキオ人の状況は殆んど同一のもの如くである。アルブケルケ傳にゴール人の國はレケヤと稱ばれるといふ如く、一見この二個の民族をポルトガル人は混同し、同一の民を或る者はゴール人とのみ稱し、他の者はレキオ人とのみ述べたやうに思はれる。

レキオ人の名の由來する琉球人の當時に於ける南洋方面の航通を見るに、尙家所藏の諸家譜によつてその通交回數の表を作られた秋山謙藏氏に據れば次の如きものである。

滿刺加へは寛正四年(一四六三年)に二度、同六年(一四六五年)、文正元年(一四六六年)、應仁元年(一四六七年)、同二年、明應二年(一四九三年)、永正七年(一五一〇年)に各一度行き、爪哇へは嘉吉六年(一四四一年)に、蘇門答刺へは應仁元年(一四六七年)、同二年に、佛太仁へは延徳二年(一四九〇年)、明應七年(一四九八年)各一度、永正十二年(一五一五年)二度、同十三年、同十六年、同十七年、大永六年(一五二六年)、享祿三年(一五三〇年)、天文十二年(一五四三年)、巡達へは寛正十五年(一五一八年)

に各二度行つた。

これを見れば、毎年琉球を出船することもあり、數年を隔てて就航することもあるやうだが、數年隔ててゐるのはその間に登録せられなかつた民船が出たと解し得るであらうか。ポルトガル人のマラッカ征服の頃までは數年間隔にマラッカを訪ねた。その間近隣の諸國へ行つたときにも、マラッカへ寄港したかも知れぬ。それを加へればマラッカへ行つたのは年月を隔て、ゐたといひ難いかも知れない。秋山氏に據れば、一度の人數百數十人より三百餘人に達したから、二・三艘の船を以て航海したと考へられるといふ。バルボーズがレキオより支那の船に似た三・四艘の船が毎年マラッカに來たと述べた如き、アルブケルケ傳にポルトガル人の船が毎年二・三艘マラッカで見られたといふ如きは、これらの琉球船を指すのであらう。前引した一五三六年のワスコ・カルヴオの書翰に、「彼等(レキオ人)は毎年パタネとソアヤン(暹羅)にて交易す。マラッカ王時代にはマラッカに赴くを慣はしとせり」とあるのはまたそれを肯定し、秋山氏の表に見られる如く、一五一一年以後に琉球船がマラッカに行かず、パタニへは一五〇九年以後、殊に一五一五年の後は頻繁に航行したことに一致する。バルボーズのいふ、ポルトガル領有以來マラッカヘレキオ船の來なかつたこともそれによつて了解せられる。乃ちアルブケルケ傳にある、マラッカ戰爭中シンガポールまで來て前進することを躊躇しマラッカ知事の保證によつて戦後にマラッカに行つたポルトガル人は最終寄港をなし、それ以後はポルトガル人を避けてその主要なる交易市を變へて毎

年バタニに向つたと思はれる。フェルナン・ペーレスの船隊が一五一六年支那に行くに先だつてマラッカ出帆後バタニに寄つたとき、そこは支那人、ジャワ人等の船の湊るところであるが、殊にマラッカ占領後は、その原因からこれらの國の船が輻輳してゐた^(二四)ことを見出したのは正しくそれを肯定するのである。

バルボーズがレキオ人の消息を記して、その人は色白いとか、支那人よりも富んで正直な商人であるとかと述べたのは、マラッカ人がさういつたと明かに斷はつた如く接觸して得た知識ではなかつた。一五一〇年のルイ・デ・アラウジヨの書翰に報ずる詳細なゴール人に關する記載のみは交易の状態に幾分實見に基づいたかと思はれる節もあるが、大略は聞き書きであつたやうだ。アルブケルケ傳の傳へたゴール人の消息も恐らくは間接の知識であらう。ジョアン・デ・バロスのレキオ人に關する文の如きは明かに斷定し得る間接の聞知であるとすれば、その源はマラッカの住人たる回教徒のマライ人に出でたことも推定に難くない。當時の文書によつて、マライ人に源を發した一の例を次に指摘する。一五一二年四月一日付で印度總督アフォンソ・デ・アルブケルケより國王に宛てた書翰に次の如き興味ある報告が見える。

「また陛下の御許にジャワの一安針より寫しとりたる一片の標紙も到達すべし。その地圖は喜望峰、ポルトガル、ブラジルの國土、紅海、ペルシヤ灣、香料群島及び支那人、ゴール人の航海とその船の正しき航路、その内地、隣接するその兩國を描きたり。陛下、そは予の未だ曾て見たることなき好きものと思ひたり。陛下も亦それを實見して滿悅せらるるならん。その圖はジャワの語にて名辭を表す。予は讀

書し得る一ジャワ人を有せり。その圖をフランシスコ・ロドリゲスが他圖に寫し加へたる一片を予は陛下の御許に送るなり。陛下はそれによりて、支那人、ゴール人の何處より來るか、陛下の船の香料群島に達する航路、金鑛の存する處、ジャワ及びバンダン諸島、肉荳蔻、荳蔻花のこと、暹羅王の領土、支那人航海の彼の端の國、その歸帆する處、それより彼方に航海せざる所以に就き眞實なるものを知らるべし。原の地圖はフロール・デ・ラ・マール號にて失はれたり。」^(一五)

この文の終りの意味はジャワ人の原の航海圖はマラッカ占領後總督が印度に歸るに當り、その座乗船フロール・デ・ラ・マール號のスマトラ沖に於ける難破と共に失はれたことであらう。それは、喜望峰、ブラジルをも描いてあつたといふことだから、十五世紀に作られたものではない。ワスコ・ダ・ガーマが喜望峰を迂廻して印度カリコに初めて着いたとき安針として請じた^{ニハ}イブン・マトジッドの如き練達な回教徒の安針にしてポルトガル人の發見航海に熟通した者が作成したのであらう。中世以來アラビヤ人の航海通商をなしたとき彼等の間に航海圖が用ゐられ時代を経てその航海範圍が擴がると共に訂正増補せられて行つたことは容易に推察出来る。この航海圖は十六世紀に入つて間もなく彼等アラビヤ人の航海範圍に新たにポルトガル人の發見した海圖を書き加へたものであらう。その地圖には支那人、ゴール人の航路が示されてあつたのは、勿論アラビヤ人の元來有した知識を以て描かれたのである。ジャワ語(マライ語系に屬する)で名辭が表されてゐたのはアラビヤ語より譯したか、或ひは今日の如くアラビヤ

文字と同一の字を用ゐてゐたかであらう。これを以て、ゴール人の名がポルトガル人の命名に依るのでなく、アラビヤ人若しくは回教徒たるマライ人に由來することを明かに知られる。これに關聯して、前島信次氏の紹介せられた^{二七}十五世紀後半のアラビヤ航海士イブン・マージットの著書に見えるグール人を考へねばならない。ガブリエル・フェラン氏が佛語に譯したマージットの著書の一節が、桑田六郎氏の^{二八}記事中に載せられた。それに據れば、グール島は支那の上方南側にある人口多き大島であり、その王は支那人と戦ひ、そこにはグールと稱する鐵鑛のあること、及び世界の著名な島嶼中にリキュー島が數へられ、それは一般にはグールの名を以て知られてゐることを述べられてゐる。また同氏は十六世紀前半のスライマン・アルマーリの著書に見えるグールをも併せて記載した。それには、グール島は支那の南方にあること、グールと稱する鐵鑛があり、銳利な刀劍を作ること、その名はジャウ語でリキヴィと稱ばれること、その國王は支那の王が兵力資力共に強勢なるに拘らずそれと戦ひをなすこと、その民は甚だ勇敢であること等が見られる。これらのアラビヤ人の文中に見えるグール島が支那の南にあるといふのは東の誤りであることを前島氏は指摘した。また支那と戦ひをなしたこと、刀劍を作つたことを以てそのグール島が日本であると同氏は主張せられた。それらの理由は前島氏の斷定の如く、グールがより多く日本に似てゐることを肯定せしめる。併し、そこには、なほリキュー島と普通には稱せられてゐるといふ如き曖昧な記述がある。これは當時のアラビヤ人またはマライ人が琉球の名を知つてゐて

も日本の名を正しく知らなかつたことを證するものである。ポルトガル人の傳へたゴール人に就ては、その名稱に於いて明かにアラビヤ人若しくはマライ人を踏襲したが、その他の説明は寧ろ當時の新たな情報によつて付け加へたものの如くである。アルブケルケ傳にゴール人の國をレケヤと稱するといひ、アラウジョの書翰にあるゴール人の舶載品中刀劍等の見えるを除いては、全く前記のアラビヤ人の記述と符合するところがない。これは、傳へた時と人によつてその消息が異なつたと推測せねばならぬ。兎に角、ポルトガル人のいふゴール人も、その航海の状況と舶載し來る物産の種類、その風俗より見て、やはり琉球人よりも多く日本人に近いといへる。併し、ポルトガル人のうちマラッカへ來たレキオ人の名のみを記する著者の述べたレキオ人の状況とゴール人のそれは前述した如くに殆んど區別し難い。その點に於いてポルトガル人のいふゴール人は琉球人にも充てられるといつて差し支へがない。この點より考へればポルトガル人のいふゴール人が日本人琉球人の孰れとも斷定し難い如く、アラビヤ人若しくはマライ人のいふゴール人にも疑ふべき餘地がある。當時マライ人の有してゐた日本琉球に關する智識が如何に不確であつたかを示す一の事實がある。

フェルナン・デ・マガリヤエンスの初めての世界周航船の生存者アントニオ・ピガフエタがチモール島碇泊中に記した日記に、「支那沿岸には多くの民族あり。そは次の如し。漳州人眞珠の漁獲をなす諸島に住む。そこには桂皮を産す。レッキー人、そは前記の諸島に近き地に住む。その港の入口は大なる山嶽

によりて貫かれ、故に港に入らんとするジャンクや船は帆を解かざるべからず。その國はモニと稱せられ、支那王に従屬す。併しまたその王はその制御の下に二十の王を有す。」^(二九)とある記載がチモール島のマライ人より得た消息に従つたものである。一五二二年までにはマラッカ方面より東進したポルトガル人が支那を訪ね、琉球の消息にも幾分通じてゐた筈であるに拘らず、太平洋を超えて來たエスパニヤの船員がそれを顧みずして、このやうな無稽なレッキー人の國を傳へた。このレッキー人の國は見る人によつて日本らしくもあり琉球らしくもある。これを以て、マライ人の極東に關する智識が一五二二年に於いても尙この程度の曖昧なものであつたことを知るに足るのである。マラッカに在つたマライ人は、少くも一五一〇年頃まで屢々琉球人の寄港によつてチモール島の人々よりは確かな事實を見聞してゐたから、アラビヤ人のグール人、ポルトガル人のそれより傳へたグール人、レキオ人の消息には、その産物と貿易品の如き稍々眞實に近いものが見えてゐる。併し、歸するところ、それも程度の差であつて、その兩民族が確然と日本人であり琉球人であると區別し難い程不確な智識であつた。

翻つて十六世紀初頭に於ける日本人、琉球人の南洋航海を見るに、前引した秋山氏の論文に研究せられた如く琉球より南洋への通交は琉球の文書によつて概略を窺ふことが出来るが、日本にはそれに関する記録がないといはれてゐる。日本人が當時有名な和寇として極東の諸國の沿岸に横行したに拘らず、その記録が支那にあつて日本にない。それ故に、若し南洋方面にもその足跡を印したとしても日本にそ

の記録が残らないのは寧ろ不思議とは考へられぬ。支那、朝鮮は、日本に近いから和寇の害を被ること多く、また文事の發達した國であるから深刻な恨を以てそれを書き残したが、印度支那南洋方面は日本よりの距離も遠いから、和寇が達したとしてもその被害の數も程度も寡く、従つてその事蹟が明かには書き留められなかつたかも知れない。それ故に、日本人が當時印度支那南洋方面へ行かなかつたとは斷定し難いが、航行したと敢て肯定する根據もない。

アラビヤ人の記載したゴール人の消息には和寇の風聞に近いものがあり、ポルトガル人の報告に見えるゴール人の航海日程、貿易品、風俗等にも日本人に該當すべき點が多いから、恐らくは、日本人も南洋に達したことがあつたと推察し得るが、貿易品には琉球人の仲介するもの、風俗容貌中には琉球人と區別し難いものもあり、且つ前に説いた如くレキオ人として傳へられた事實とは殆んど同一に近く區別し難いからこれ亦容易に斷定することが出来ない。その意味に於いてはアラビヤ人のリュウキュー、ポルトガル人のレキオ人も字義通りの琉球人のみを指すとはいひ難いのである。フェルナン・ローベス・デ・カスタンニエーダの著書には一五一一年の頃にゴール人を記し、一五一七年のポルトガル人支那訪問のときはレケアを擧げた。ゴール人の名を載せないのは主としてジョアン・デ・バロス、ガスパール・コレヤの如きマラッカ占領當時より二・三十年後に編述した著者である。これは、ポルトガル人の支那到達後、琉球の確かな消息を知り、それを以てマラッカ占領前後の記録に見えるゴール人、レキオ人といふ

曖昧な名稱を整理し、バロス、コレヤの如きは無稽なゴール人の名を無視しそれをレケヤに代えたのであらう。これを言ひ換へれば、これらの最も重要な史書に於て、ポルトガル人の支那訪問前のレキオとその後のレキオとは意味を異にし、前者は甚だ漠然たる極東の日本琉球諸島全般を、後者は限定せられた琉球を指したものである。これに關聯して考へられる興味深い一書がある。それはダミアン・デ・ゴエスが一五一七年フェルナン・ペーレス・デ・アンドラーデの支那行を敘した一節である。

「廣東にて都督との交渉決定し廣東よりの歸途再度(タマオに)十四箇月ありたり。その後は、支那王の領土、權力、諸主權との交渉を探知するまで支那には留れとの國王ドン・マヌエルの訓令を帶してありたればなり。その間そこへレケオス・グオロス・ジャポンゴスの多くのジャンク來れり。それらの齎らしたる主なる商品は多量の金なりき。これを見て、彼(アンドラーデ)はこれらの國々へ安針と通譯者を附してジョルジ・マスカレーニヤスを派遣せんと決意せり。(中略)、支那には多くの金銀あり、また他の地方より、例へばレケオス、ゴーロス、イヤポンゴスよりも多量に出来る」¹⁰⁰

この文にはレケオス、ゴーロス、ジャポンゴス即ち琉球人、ゴール人、日本人の三名稱が並記せられてゐる。アンドラーデの支那訪問を記載した書には印度に在つたバルロス、カスタニエーダ、コレヤの如き既にゴール人の空名たるを知つてそれを除かれ、また一五一七年頃以後の諸書翰にも絶えてゴール人の名が現れてゐない。ダミアン・デ・ゴエスはその身ポルトガルを出でずして唯文書によつてのみ史を編ん

だ故に、その間の事情に通せずして當初の漠然たるゴール人の名、限られた琉球人に當るレキオ人、新に見え始めた日本人の名ジャボンゴスを並記したと思はれる。この事實を遡て考へれば、ゴール人を琉球人でもなく、日本人でもない意味を有するものとしてマラッカ占領時代のポルトガルが傳へてゐたことを證する。

以上に論じたところを以て、一五一五年頃以前にポルトガル人の傳へたゴール人、レキオ人に區別を置き難く、且つ琉球人のみを意味せずして日本人をも加へて考へねばならぬことを推察せられたであらう。

併し、ポルトガル人の支那に到るまでは、彼等の報告にも史書にも日本に相當する語を發見しない。琉球の名に基づくレキオが數々見出されるに對比し、假にゴール人の名の語源が日本に關係ありとしても、日本人を直接に意味するまでの強い印象を以て記録せられたのではない。これに就ては、琉球人程日本人が多く南洋に渡らなかつたからであらうと憶測する。

ポルトガル人の記録に見えるところに據れば、レキオ人ゴール人はマラッカ占領後にはそこへ行かなかつた。またアルプケルケ傳のいふ如くは、ゴール人はその本國以外の地に滯るを欲せず、交易を終へて迅速に去つて行つたから、當時はマラッカを始め南洋の方面に定住したものもなかつたと推察せられる。それ故にマラッカ占領の前後に殆んどポルトガル人と接觸する機會を有しなかつたであらう。而し

て、それらの二民族の船載する物資には支那よりの仲介品もあり日本特有のものもあつたが、接觸しなかつたから特に深くポルトガル人に留意せられなかつたかも知れない。ポルトガル人は殊にその二民族の齎らした金に注目した如くに書いた。金は實に十五世紀十六世紀初半を通じて日本の主要な輸物であつた。明孝宗弘治の大明會典にも「抽金粉匣、抹金銅提銚、貼金扇」を日本の特産物として擧げられた。ポルトガル人の方にも一五一〇年二月マラッカ發のルイ・デ・アラウジヨの書翰に、「マラッカの附近に二金鑛あり。その金鑛と、ゴール人の國より毎年九・一〇パールを當地へ齎らさるる金とを以て」云々といふ如く、バロスが「レキオと稱ばるる諸島のレキオ人の齎らす多量の金」を以てマラッカ戦後に貨幣を鑄造したと述べた如き、アルブケルケ傳のゴール人が國王の刻印ある金板を多量に齎らしたと記した如きは最も著しく、バルボイザ等の書もこの民族船載品の筆頭に金を擧げた。また、ポルトガル人の支那到達後も、バロスに據れば一五一七年フェルナン・ペーレスがタマウでレキオの船の載せて來た多量の金とその他の高價な物資を見てレキオを探らんと志し、コレヤに據ればレキアは金・銀・生絲等の寶庫であると聞いたからその國を探らうとし、ダミヤン・デ・ゴエスに據れば、レケオス、ゴロス、ジャポンゴスのジャンクがタマウへ數多來り、その主なる商品が金であつたのを見てそこへ船を遣らうと決心したのであり、一五一八年支那に行つたシマン・デ・アンドラーデがその年八月一日國王に宛てた書翰に大なる金鑛のあるレキオス諸島のこと(二二)が報せられ、一五三六年廣東發ワスコ・カルヴオの書翰にも

レキオの船が毎年支那へ金銀棒その他の商品を載せ行くことを書いた。ポルトガル人の耳には日本の金の輸出が餘程強く聞えたに違ひない。マラッカよりも日本に近い支那に於てはより多く留意に上つた。併し、彼等は一五一七年タマオより金の出づる諸島を一度探險しようとして敢行しなかつた以後には、復たそれを繰り返さなかつたのは、支那人の舶載した絹織物類や麝香の如き香料に惹きつけられその交易の利益に深く着眼したよりも執着するところが強くなかつたといはねばならぬ。それは、日本の金が支那の産物の如くに多量に行き渡らなかつたためでもあらうが、また一方には當初より他に産金地があつてその需用を満たし得た故でもあらう。マラッカに近いスマトラ島^(二四)、ジャワ島及び印度カンディヤ^(二五)(ジョルジ・デ・アルブケルケ一五一五年八月八日書翰)よりも多量の金が舶載せられたことが當時記録せられた。

以上を要するに、ゴール人がマラッカへ來た當時のポルトガル人にとつては支那人に次いで留意すべき極東の存在であつたことが、一五一三年六月六日ポルトガル國王よりローマ教皇への書翰に東印度の^(二六) 状態を述べた一節にスマトラ、ペグー、ジャワ、ゴール人、支那と列記したところによつても、また^(二七) レキオ・デ・アラウジョの書翰に詳報したことによつても推斷し得る。而かもそのときにはゴール人、レキオ人の名は單にマラッカに於てのみならず、遠くマライ群島、フィリッピン諸島にまで達してゐた程東洋諸國に於ては有名であつたが、ポルトガル人のマラッカ占領後マラッカへ寄港しなかつたのでポルトガ

ル人と接觸せずその支那に現れるまでは次第に疎んぜられて行つた。而かもポルトガル人はゴールといふ名の眞偽をすら詮議する程熱心を示さなかつた。それ故に、日本、琉球の區別を久しく知らなかつた程で何等の調査も行はなかつた。これを遙かに早くよりポルトガル人が支那の存在に留意し、接觸して經濟上の勢を無視することが出來ず、マラッカに近づいていよいよ支那の大勢力を知つたのは甚だ相違する。また支那船載出の大部分がその特産物であり、且つ大量に行き渡つてポルトガル人の注意を充分に惹き、従つてポルトガル人はそれを研究調査して支那への輸出入によつて大利を得べき確信を抱き迅速に支那訪問を企てたのと、ゴール人、レキオ人の船載物に支那仲介品が多く、その特産物も印度南洋方面に行き渡る程多くはなく、ポルトガル人をして深くそれに關心せしめなかつたのは隔段の違ひがある。

(一) Commentarios. Pt. III. Cap. XVIII, - Pp. 68, 69.

(二) Commentarios, P. 72.

(三) Castanheda, Historia, III, p. 258.

(四) Barros, Dec. II, Liv. IV, Cap. 1, - tom. IV, p. 26.

(五) Letters from Portuguese Captives in Canton, written in 1534 and 1536, P. 69.

(六) Barbosa. Livro, P. 375.

(七) Barros, Dec. II, Liv. VI, Cap. VI, - tom. IV, p. 90.

- (八) Barbosa, Livro, P. 375.
- (九) Alguns Documentos, P. 261
- (一〇) Cartas de Afonso de Albuquerque, III, P. 372.
- (一一) Ibid., P. 297.
- (一二) Cartas de A. de Albuquerque, II, P. 134.
- (一三) 室町時代に於ける琉球の印度支那諸國との通交 歴史地理 55, 6.
- (一四) Barros, Dec. III, Liv. II, cap. VI, - tom. V, P. 183,
- (一五) Alguns Documentos, P. 261.
- (一六) 前島信次氏 ヨーンス政 史學雜誌四三ノ三
- (一七) 前島氏前引書
- (一八) 桑田氏 ヨーンスは五島か 南方土俗 二ノ一
- (一九) Pigafeta, Primer Viage, P. 79.
- (二〇) Goes, Cronica de D. Manuel, III, pp. 56, 58.
- (二一) Barros, Dec. III, Liv. III. Cap. VIII.
- (二二) Correa, Lendas, II, p. 529,
- (二三) Alguns Documentos, p. 421.
- (二四) Barros, Dec. II, Liv. VI, Cap. VI.
- (二五) Cartas de Af. de Albuquerque, III. p. 134
- (二六) 秋山謙藏氏 Goes は琉球人である 史學雜誌三九ノ三参照

四

アメリカの發見とその航海に熱中したエスパニヤ人は日本に就て全く無關心ではなかつた。ポルトガル人印度到達後その點に於て實際的なるに反し、當時の地理學に立脚する一の理想を追求したものと云ふことが出来る。それだけに根柢深く、執拗な態度をとつた。エスパニヤ人の當初に求めたのは遠くマルコ・ポーロの書に源を發するジバングであり、寧ろジバングの幻影であつた。

アメリカ發見の功勞者クリストバル・コロンの息子フェルナンド・コロンボに據れば、コロンボのアメリカ探見の思想は、遠くストラボン、プリニウスよりマルコ・ポーロ、ジャン・デ・マンデヴィル、ピリエル・ダイリ、ジュリオ・カピトリニの智識に負ひ、殊にフェレンツの物理學者パオロ・トスカネリによつてその計畫の基礎となつた決定的理由が供せられたといふ。その概念は世界の海陸が一の球をなし東より西に向へば元の地點に歸るといふことであり、世界の陸土が海面よりも多く、エスパニヤの終端と印度の始端との間には多くの島を發見せねばならない、而かもストラボンによつてその當時まで如何なる船も印度の極東に達したものが無いとの心念であつた。

トスカネリよりコロンボ及びフェルナンド・マルチーネスに與へた一四七四年七月二十五日の書翰を

見るに、彼がヨーロッパより印度への最短航路と信じたものを説き、アイルランドよりギネヤに南下し西方に直航して群島に達すること、その東洋の一港ザイトンより多量の香料の輸出せられること、大汗のある大國とその首都カタイ及びそこよりローマ教皇へ二百年前使節の遣はされたこと、一地圖に於てリスボアより西方に直航しエスパシオが百五十哩に當る二十六エスパシオにしてキンサイに至るそれはカタイに近いマンゴに位置すること、その地圖のアンチリヤ島（今日西印度の同名諸島ではない）よりシバンゴまでは十エスパシオ即ち二百二十五レグアを數へられる。シバンゴは寶石、金に富み寺院王宮等は金板で覆はれること等^(五)を説いた。

トスカネリの地理學は殆んどマルコ・ポーロの旅行記の記事によつて築かれてをり、トスカネリによつて導かれたコロンボの智識も従つてその根底に立つたものであつた。コロンボのアメリカ發見の動因がその子の指摘した如く實に多數の複雑な諸點に互つてゐるが、カタイに到達しジバングを發見することもその一であつたであらう。コロンボ自身がジバングを發見しやうと述べた文書を知らぬか、ヨーロッパと印度との間に多くの島があるべきものと想定したのはこれを暗示する。

コロンボ初度の航海と同じ年に作成せられたマルチン・ベハイムの地球儀には、ジバングは印度上海と印度東海の間を横たはる長い大島でヨーロッパの西端より經約九十度、支那の東岸より約二十度隔て、南北北緯七度より三十度頃に及び熱帶圈に在つて世界の東端になることが説明せられ且つマルコ・ポー

に依つて金、寶石、眞珠、香料を多量に産することを添えられた。この地球儀はその以前の地圖の影響をも受けてゐるけれども、主としてトスカネリーの智識に基づくことは一見して明かに知られる。ベハイムに描かれた地理上の位置は當時しばらくの間大勢を支配しそれによつて多くの地圖が現れ、エスパニヤ人の航海の發展を刺戟した。

「ジバングに關する限りに於ては、上述の如く新大陸發見近き一五〇〇年に成りしコサの世界圖並に一五〇八年のルイシュの世界圖には、共にジバングを脱して居る。之は決して偶然ではなく、コロンブスの新大陸發見によりて、ジバングの問題は解決せられしものと考へたのであつて、中にもルイシュの世界圖には、新發見のスパニョラ島の左方には次の如き挿句がある。『イスパニヤの航海者によりて、發見せられたる島は恰もジバングの位置に當るが故に、イスパニヤ人によりて、イスパニヤと呼ばれたる地はジバングならざるべからず。仍りて此の島を圖上に表はさずジバングに關する凡ての逸話は、偶像崇拜を除き、悉くイスパニョラに當嵌むるを得べし。』といふて、ジバングを脱せし理由を説明して居る。而して新陸地とジバングとを同一と看做せしルイシュのこの記述は、コロンブス西航の目標がジバングの到達に在りしならんとの想定を、側面より證據立つるもので、興味ある挿句と言はねばならぬ。兎に角一五〇八年迄は歐洲の地理學界少くともルイシュの郷國たる和蘭にては、新大陸即ちジバングと信じてゐたものである。ルイシュの世界圖に先つこと八年、新大陸發見後八年に成りしコサの世界圖に

は、ジバングに關する何等の描寫もなく、唯新陸地を非常に大きく現はし、赤道の南北に跨る大陸地として描かれ、ジバングは之に覆はれて居る。コサは上述の如くコロンブスの第二航海に同乗せし海員故其の第一次第二次の航海により、續々新陸地を發見せしものから、ジバングの如きは既に眼中になく、唯之と比較すべからざる程の大陸あるべしと希望と抱負との下に、ジバングを削り非常に大なる新陸地を現せしと考へらる。何れにしても新大陸發見直後に在りては、歐洲の地圖學界に於てジバングは新大陸の一部と考へられたるものにして、之はユールの説の如くコロンブスの死に到る迄の考であつたのみならず北歐羅巴邊にては、數十年の後迄、引續きこの考があつたやうである。^モ

この石橋博士の説は甚だ卓見であつて、ジバングに關する限りその間の推移を説き盡してゐる。而して、一五一一年に作られたルノックスの地圖とシルワヌスの地球儀に再びジバングが現れ、北緯三十度上に位し東西の位置が新發見のテラ・クバより約四十度を隔てて支那と接近して描かれたのをポルトガルの材料によつてその位置が決定したのであらうと考へられた。その理由はポルトガル人が印度に達し東洋事情に通じ、ジバングの位置が從來よりも正しく知られたといふことである。併し、ポルトガル人は一五一〇年前には未だジバングの存在に就て調査したことは勿論、考へ及んだといふといふ形跡がない。この當時の實見を傳へた知る限りのポルトガル人の報告と著書にそれを見出すことが全く不可能である。それは寧ろ、エスバニヤ人がその始めアメリカを印度及びその東縁の諸島と見做したが、發見

が進むに従つてアメリカが印度とは全く異なる大陸であることに氣付き、同時にポルトガル人の達した印度を考慮に置いて、アメリカと印度との間に支那、ジバング等の存すべきを推測した智識に因るものであらうと思はれる。その時代を前後して作られたコンタリニの地圖のジバングを南アメリカの北西に、ストブニクザ、シエーネル等も各々或は北に偏し南に傾けてジバングを置いたのは皆同じい理由によつて作者の推測を表はしたのであらう。エスバニヤ人の日本に關する知識はこの當時常にヨーロッパの地理學者の進歩と歩調を一にし互に助けあつて智識の野を次第に擴めて行つたが、マガリヤエンスの太平洋を斜斷してフィリッピン群島に達したときにもジバングの位置を知らなかつたやうである。

一五二一年のマガリヤエンスの世界一周航海は始めてアメリカ大陸より太平洋に出でてアジャ大陸東邊の群島へ南東より北西に斜斷したのであるから、カタイ、ジバングの發見が期待せられた筈である。その船隊の一員たる航海日誌を書き残したアントニオ・ピガフェタは唯一のその問題に言及した人であつた。ピガフェタのジバングに關する考へは甚だ混雜してをり、而かもその航海の重要な目的でないかの如くに軽く言及したに過ぎなかつた。この船隊の名を無窮に傳へる南アメリカ南端の海峽より北東に船の針路を定めたとき、南半球にジバングがあるものと信じたのは當時のヨーロッパの地圖に依頼し、またエスバニヤ人アメリカ踏査後の歸結として生じたのであらう。

「我等の航海の途中に甚だ高き二個の島近くを通過せり。その位置、一は南緯二十度、他は、十五度を

なす。前者はジバングと後者はスプミット・プラディットと稱せらる。我等はその線を通過したる後、西方と北西四分の一西との間を航行せり。それよりまた西方へ二百レグア走り、更にその後方向を轉じ北緯十三度に達するまで四分一南西に帆走せり。この航程にて我等は、地理學者がその緯度に置きたるガチガラ岬に到達すべきを期待せしもそは誤りてありたり。その故はその岬は更に十二度北方にありたりければなり。然れども我等未だそれらの地點を訪ひたることあらざるなれば、その誤りも許され得べきなり。」

これはピガフエタの一五二一年一月中の日誌の一節である。そのジバング及びスプミット・プラディットと推定した二島は恐らくは今のサモア群島乃至ソサイティ群島中の一部と思はれる。マガリヤエンス及び全員がそれをジバングと認めたとすればそこに寄港して探險したかも知れぬ。またそれともジバングに就て全く智識を有してゐなかつたのかも知れない。ピガフエタの日誌に見えるところでは一個の私見であり、その二島に執着しやうとした様子が見えない。ピガフエタはその後モルッカ諸島に寄つたとき、その回教徒より得た知識によつてスプミット・プラディット島を北半球のカタイ・オリエンテの近くに存すべきものと考へを訂正した。ピガフエタが北緯十三度にある筈だと期待したカチガラ岬とは當時の地圖、殊に一四八二年のニコラウの世界地圖に子午線百八十度北緯九度アフォルツナダス諸島の一岬として且つ支那の一都市として説明せられてゐるカチガラである。ピガフエタの記したそれらの地名

の孰れもが甚だ誤つてゐたのは、初めて太平洋を航海し暗中摸索を試みたのであるから許さるべきことである。思ふに恐らくその全員中最も地理的知識に富んでゐた故に架空の推定をなして兎に角ジバングに思ひ及んだのであらう。

マガリヤエンス船隊の乗組員の航海記録はピガフエタの日誌外に二文書が現存してゐる。その一である安針ヒネス・デ・マフラの航海記には、「前記せし如く、マガリヤエンスは、大なる悦びを以て（マカリヤエンス）海峡を出で、暖かき國に入り且つ北方の國へ向ふ線を横斷せんために北西に針路をとらしめたり。而して未知の海流に遭遇して南緯三十度までは航程捗どらざりしが、その點よりは日光一行を熱したり。稍々航路を利するため船隊を北西に向け、ときに東を指さしめたり。これ雨風交みに吹きたればなり。この方位をとりて南緯十度に下るまでは島をも陸をも見出さざりき。十度の點に到りて甚だ小さき一島を發見せしが、こは自然が海波より防ぐために備へたりとも思はる礁脈を以て取り巻かれたり。その島に近づく能はざれば船隊はそれを見過ごし、それより五十レグア同じき方位に同様なる他の一島を見たれどもそれに慰安を求むる能はざりき。それらの島影に別れて前進し、赤道を知り北緯十一度半に至り、そこより眞直に西方に航行して三箇月間を費やしたり。」と述べ、他の無名安針の日誌には、「（マガリヤエンス）海峡を去りて、殆んど西北西に航路をとりたれば一同西方に向ふを知りたり。そのとき羅針^{1/4}に下りたり。斯くして數日航海したる後略々南緯十八度また十九度に一島を、また十三度より

十四度に他の一島を發見せり。それらの諸島は住人なし。また航走して、フェルナン・デ・マガリヤエンスマルツコ的位置にありといひたる線に達せり。マルツコには糧食なしとの情報を有せしかば、マガリヤエンスは北緯十乃至十二度に行かんとすといへり。それより北緯十三度まで達し、その點より西及び南西に約百レグア航行せり。」と記した。この兩記錄に見える二島の位置は異なるけれども、ピガフェタのジバング及びスプミット、プラヂットに充てた二島に該るものと考へられる。この兩安針はそれに就てピガフェタの如き推測を下さず、前者はその一が珊瑚礁島であり後者は無人島であると觀察したに過ぎない。後者の記錄に據ればマガリヤエンスは太平洋の西縁モルツカ諸島に達する方向を略々知つてゐたやうである。それは彼が前に東印度にあつたときの智識に負ふたのであらう。併し、ジバングの何處にありやはピガフェタ程にも關心したであらうか。兎に角記錄を残した二安針はラドロン諸島を詳述したがジバングを期待する一言をも載せなかつた。

無名安針の如きはフィリッピン諸島に達した一五二一年三月中の記事に、その土人よりその以前レッキト人、ゴロ人若しくは支那人らしい人が來たことがあると聞いたと述べたが、そのレッキト人またはゴール人がジバングの民と關係ありや否やに考へ付かなかつた。これは反面に於てポルトガル人のマラッカで知つたゴール人、エスバニヤ人のこのフィリッピンで聞いたゴール人を全くジバングとは別に見做してゐた、言を換れば、ゴール人の名を知る者はジバングを連想せず、ジバングを想像する者はゴ

トル人を知らなかつたことを證するものであらう。

マガリヤエンスの船隊のエスバニヤ人がジバングに就て關心した程度を以上の論述以外に深く知ることが出来ないが、概してエスバニヤの航海者はそれよりも強くその問題を考へてゐたやうである。マガリヤエンスの後一五二五年第二回の太平洋横斷の船隊がフレイ・ホーフレ・ガルシヤ・デ・ロアイサに率ひられてモルツカ諸島に向つたときは積極的にジバングを搜索し大きな苦勞の末それを斷念した。その航海よりエスバニヤに歸つた船隊の一員アンドレ・デ・ウルダネタがワリヤドリッドにてエスバニヤ國王に呈出した一五三七年二月二十六日付の報告書には、カピタン・ロアイサ及びセバスチャン・デル・カノの死後トリピオ・アロンソ・デ・サラサールが代つてカピタンとなつたときの一節に、「このときに當り我等はジバングを探求して北緯十四度乃至十五度の海上を奔走して辛苦し疲勞せり。全員唧筒と波浪と戦ひて勞苦甚だしく、乏しく且つ惡化したる食物飲料水を以て、疲勞したりければ、毎日死する者あり。その故に、我等は、航路を變じてマルツコ(一三)へ向ふに一致せり。」と述べた。エスバニヤ國王の訓令を帶びてジバングを探見しやうとしたことを明記せられてゐないけれども推知せられる。エスバニヤ人はこの當時には、ポルトガル人の東印度に於ける發見の進達を知つて、モルツカ諸島をポルトガル人より奪取せんとし、また未だポルトガル人の到らない國の發見に先便を付けやうとの意圖を抱き始め、従つて古來有名にしてポルトガル人の船の行かないジバングにいよいよ強く執着したのである。一五二五年には別にエ

スバニヤ國王カルロス五世は北方探見を以て名を知られてゐたイタリヤ人セバスチアン・カボットを國王直屬の安針に任じ、モルツカ諸島へ向ふ一船隊を嚮導し、且つ或る未知の國々の發見に従ふ約束をなした。同年九月二十二日トレドより發せられたその船隊に關する勅令に次の如き趣旨が見られる。『それ故に、予は、タルシス、オフィール、シバング、カタヨ・オリエンタルその他の諸島並びにその約定に含まるる諸島の發見のため一船隊を遣はす。それに就き、予がカピタンにて安針長たる汝セバスチアン・カボットを撰任せしめたるを決定す。(中略) 本令によりて汝を前記の船隊のカピタン・ヘネラルに任命す。』カボットは國王よりこのやうに廣汎な命令を受けてエスバニヤを出帆したが南アメリカのパラナ河に進入してその目的を破り、遠征を失敗に終らしめた。このエスバニヤ國王の勅令には明かにエスバニヤ國王がジバング等の探險を命令したことが見られる。而して、そのジバングは古傳説にあるオフィール及びタルシスと同じく遇せられた。オフィール、タルシスが當時の地圖によつて求めてもポルトガル人の發見航海した範圍にあり、カタヨ・オリエンタルが支那に相當しポルトガル人がその南の一部に達してゐたが、エスバニヤ人はそれに関せず、尙ポルトガル人の活動範圍外に或ひは發見せられ得るものと考へたのであらう。總じて、それらの上古並びに中世の傳説と紀行を以て傳へた當時の地理學による諸國を、アジヤの東邊にありとせられた印度の更に東に存在することを疑ひ得なかつたのであらう。それ故に地理學者の假説に従つて、或ひは太平洋の南半に或ひは北緯十五度の邊りにジバングを搜索して徒勞

をなしたエスバニヤ人にして、寛くポルトガル人の航海の支那に到り琉球に近づいた跡を研究しそれに太平洋に於けるその経験を以て推定したならばポルトガル人に先んじて日本に着いたかも知れない。前出したアンドレ・デ・ウルダネタが、その後三十餘年後新に太平洋を超えてモルツカ諸島に赴く船隊のために、その経験によつて航程を詳記してフェリッペ二世に呈出した書翰には、當時日本へポルトガル人が通商してゐた情報を参照して次の如く書いたのは、既にジバング発見のためには遅きに失したが、當時の太平洋航行の情況を知るべき一の興味ある記録として引用するに足りる。

「ヌエバ・エスバニヤの沿岸より南部(航路)をとりて航行せんには一月中に出帆す。一月中に出發する能はざれば、三月またはその後に至りて、北極方面に近づきて航海し得べき風期を待たんとす。そのときはにはヌエバ・エスバニヤの岸に沿ひて西北西に向ひ、北極への通路を與ふる風向きとなるとき、海岸より離れてありとも、三十四度若しくはそれより高度まで航走し、そこに於てファン・ロドリゲス・カブリーリョの発見せし海岸を認知せんことに努むべし。その海岸にて得らるる物を船に補給し且つロドリゲス・カブリーリョがそこより陸の方に進みたるとき土人が知らしめたる一大海流に就きてその土人の経験を合圖によりてなりとも聞きとりて、沿岸にそれを求むべし。海水に鹹味強きや否やは徴候によりて直に見分け得る故に、若しその海流たりその陸地そこに終端せばそは果して間違ひなきやを知らんために岸に沿ひて探り、幸に神の恩寵によりてそれなるを見出すときは、そこより西に方向を變ず。

三十七度乃至三十五度に下るまでは南西に向ひ、その點よりは西方へ眞直ぐに航走す。この間に若し先づ我等を満足せしむるに足るべき島を發見せざることもありとも、尙、この(アメリカ)陸と支那との間日本諸島の附近までにあるものを發見す。日本諸島附近に至らば西に走るをやめ我等の航路をフィリッピンに向はしむべし。」

エスパニヤ人の航海がこのやうに定まつて來たのはウルダネタがこの書翰を書いた一五六〇年より遙かに早い頃からではなかつた。少くとも、一五四二年ウィリヤローボスの船隊が六度目にモルツカに遠航した頃までは未だ航程も定まらず、北部航路を利用しなかつた。従つて久しくエスパニヤ人はジバングに到達せずして東航したその競争者に先んせられるに至つた。

翻つてポルトガル人のジバングに關する智識を推察するに、知る限りの文書にはそれに觸れてをらぬけれども、當初のエスパニヤ人と同じやうにマルコ・ポーロに由來する當時の地理學によつて聞き知つてゐたことは想像に難くない。航海の進歩が印度に至らなかつたうちには、東洋の事情に通せずして、印度附近にオフィルを考へタプロバナを想ふた如く、ジバングをもその東方に聯想したかも知れぬ。想像するに、印度到達後は幾分東洋の状態を知り、遙かに遠い容易に届き難い位置にありと考へたのであらうか。マラツカに達してゴール人レキオオ人の消息を得たが、それが有名なジバングに該る國より來たとは到底考へ及ばなかつたのであらうか。ジョアン・デ・バセスの如きはその史書に、新しい發見があり、交

涉が生じた國に就ては先づ地理の概要を述べ、古來の地理學者の傳説的地名の相當するものを詳説したが、日本を關説したときはジバングを以て表はさずして、直にジャパン(ニホ)の名を用ゐたのは、その間にジバングよりの直接の訛轉としてバロスが想定したと考ふべきであらうか。また既に一五三〇年代に入つてゐたから支那に近づいたポルトガル人が日本人と遭遇したことがありまたは支那人より日本の名を聞き知つたと假定して、それを訛つて傳へた文書の印度またはポルトガルに送られたものに據つたとすべきであらうか。一五一七年タマウ島でフェルナン・ペーレスがレキオス、ゴーロス、ジャポンゴスの船の來るのを見たと記したダミアン・デ・ゴエスは、當時の文書によつて編述したと見られるから、その著書はその間の経緯を説明すべき何物かを暗示してゐるやうである。それによつて推測するに、ポルトガル人は支那に現れた當初より日本人に邂逅し、また支那人よりも日本の名を聞いたに違ひない。ジャポンゴはそのとき耳にした音であつたと見られるが、またその著者がジバングに關聯して幾分變形したとも見られる。若しジバングの影響もあつたとすればダミアン・デ・ゴエスに等しくジョアン・デ・バロスにもそれを認めなければならぬ。何故ならバロスのジャパンが日本に該り、ゴエスのジャポンゴが日本國に當るの相違が認められるのみであり、それは傳へる人によつて、日本といひ日本國といひ得るからである。この二著者の傳へた名稱に就ては殆んど推測に據つて論ずるより他に方法がないけれども、ポルトガル人の日本發見以後それを傳へた文書には明かに彼等のジバングに關心してゐた程度が見られる。例へ

ば、初めて日本に着いた一人であつたと自稱したフェルナン・メンデス・ピントの著書に一言も日本を古書のジバングに联想せず、一五四六年に日本へ来て直に報告書を發したカピタン・ジョルジ・アルワレスもそれを述べず、一五四九年以後日本より多くの書翰を出したフランシスコ・シャヴィエル以下、耶蘇會士等もそれに觸れなかつた。一方に於て、日本發見を間接に知つて著書に載せたアントニオ・ガルワン、ディオ・デ・コウトの如きはマルコ・ポーロのいふジバングに當ることを特に添へた。これらの事實によつて考へるに、始めの頃日本に來た航海者通商者、當時の智識高き宗教者は古き傳説的なジバングに關心すること殆んどなく、そのうちにはこれを全然知らなかつた者もあつたかも知れないが、印度またはヨーロッパに在つて政事に關與し、または史を編む如き博識な人は古事に通じ地理學に明かにして、ジバングを忘れ去ることが出來なかつたのであらう。更に一步を進めて論ずれば、十六世紀東印度の航海通商に直接に従つたポルトガル人は概して地理學者の推測するジバングの如き智識を以て求められることには介意せずして通商利益を追求するに専らであつたと解すべきであらう。このことはジバングと同様の出所を有するカタイに就てもいへるであらう。カタイが大陸上より支那を稱した語であつたから、海上より來たポルトガル人は、十六世紀末西方より大陸に入り込むまでその名を閑却した。

(11) Colombo, Fern., *Histoire de la Vie et découvertes de C. Colomb*, P. 25.

(12) *Ibid.*, P. 22.

- (三) Ibid., P. 31.
- (四) Ibid., P. 23.
- (五) Navarrete, Documentos de Colon, pp. 1 - 3.
- (六) Teleki, Atlas.
- (七) 石橋五郎氏「アメリカ発見前後の地圖地球儀とミンミン」史林 一一八四
- (八) Pigafetta, Primer Viage, PP. 77, 78.
- (九) Pastels, Historia General de Zhipinas, P. 255
- (一〇) Gines de Mafra. Libro que trata del descubrimient del Estrecho de Magallanes, P. 196.
- (一一) Navegação e Vyagem. Obras Completas de Saraiva, VI, P. 121.
- (一二) 拙稿「所謂ミンミン問題の一考察 歴史地理 60. 4. P. 324.
- (一三) Relacion que hace a 8. m. André de Urdaneta...Arc. de Indias, patr°. 1 - 2 - 1/4, r°. 36,
Pastels, Historia General, I, PP. 255-256 所引
- (一四) Arch. de Indias, 1-2-1/8, R°. 4. Pieza 1.a. Pastels, Historia, General, P. 256 所引
- (一五) Carta de Fray Andres de Urdaneta a S. M., Mexico, 28 de mayo, 1560. Arch. de Indias, 58-3-9. Patr°. 1-1-1/23, no 12
Pastels, Historia. III, P. 259 所引
- (一六) 拙稿「ミンミンとハリマンミンの推移」史學 12, 2. P. 176 参照

本論文未完。他日後半を發表す。御諒解を請ふ。著者謹白。